OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	嶺南時期における蘇軾の「勧農」詩
Author(s)	趙, 蕊蕊
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2017, 51, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71393
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

嶺南時期における蘇軾の「勧農」詩

趙　蕊蕊

キーワード：嶺南／蘇軾／勧農／自己認識

一、はじめに

中國史において、嶺南地域（五嶺以南、現廣東、廣西、海南のあたり）は五嶺に隔てられて開發が遅れ、經濟や文化は發展していなかった。唐宋に至っても、この地、特に海南は依然として邊鄙かつ未開な地であり、そのために重罪人が左遷される地でもあった。唐代には、宋之問「晩泊湘江」に（『全唐詩』巻五二、中華書局、一九六〇年）「五嶺牾惶客、三湘顛頷顔（五嶺　牾惶たる客、三湘　顛頷たる顔）」、杜甫「寄李十二白二十韻」（『全唐詩』巻二二五）に「五嶺炎蒸地、三危放逐臣（五嶺　炎蒸の地、三危　放逐の臣）」という句がある。宋代にも嶺南に左遷された文人は非常に多く、そのなかには蘇軾、蘇轍、秦觀などの名臣が含まれる。

紹聖元年（一〇九四）、蘇軾は朝政誹謗の科で英州に左遷されるが、左遷の途中、朝廷の命令は度々變更され、建

昌軍（現江西南城）司馬、更に寧遠軍（今湖南寧遠）節度副使、惠州（現廣東惠陽東）安置の命を受ける。續いて紹聖四年（一〇九七）には、舊法党は再び大規模な貶謫を被り、蘇軾は瓊州（現海南瓊山）別駕、昌化軍（現海南儋縣）安置を命ぜられ、建中靖国元年（一一〇一）に北歸するまで、嶺南にほぼ八年の流貶の生活を過ごした。「重罪」を課された蘇軾は詩文の中に左遷の苦悶を表すと同時に、嶺南の絶妙な風光を賛美し、當地の風土や人情を詳しく記錄している。[1] この時期の作で最も注意すべきは、彼が左遷の厳しい境地でも農事への關心を失わずに、しばしば農耕に關することがらを述べている點であろう。

中國において、古くから一貫して重視されてきた「重農・農本」思想は、官僚文人としての蘇軾の作品にも明確に見られる。特に嶺南に左遷された後、彼は嶺南の飲食や農耕に基づき、いろいろな「勸農」活動を行っているほか、陶淵明の「勸農」詩（四言六章）に唱和し、農耕の重要性を訴えると同時に彼自身の獨特な思想を表現している。本稿では、嶺南時期における蘇軾の「勸農」活動を端緒として、彼の創作意圖や唱和作に現れた自己認識について檢討してみたい。

二、嶺南における飲食と農耕

嶺南地域は、高温多雨の氣候であるため、様々な果物が育つ。紹聖元年、蘇軾は惠州への途中で作った「舟行至清遠縣、見顧秀才、極談惠州風物之美」に

江雲漠漠桂花濕　江雲　漠漠として桂花濕い
梅雨脩脩荔子然　梅雨　脩脩として荔子然ゆ

聞道黄柑常抵鵲　聞道くならく　黄柑　常に鵲に抵り
不容朱橘更論銭　朱橘　更に銭を論ずるを容れずと[2]

海南で作った「和陶癸卯歳始春、懐古田舎二首」其二に

丹荔破玉膚　丹荔　玉膚を破り
黄柑溢芳津　黄柑　芳津溢る[3]

とあり、嶺南のライチ、黄柑、朱橘の美味を賛美している。しかしながら、ここ嶺南は瘴癘の地でもある。蘇軾は「到恵州謝表」に「但以瘴癘之地、魑魅爲隣、衰疾交功、無復首丘之望（但だ以う瘴癘の地、魑魅隣と爲る、衰疾交ごも功あり、復た首丘の望無しと）」[4]と、瘴癘の地で魑魅と隣り合い、故郷に帰る希望もなくしてしまったことを述べている。そこの人々は「蹲鴟」（大きな芋、形はしゃがみこんだ鴟に似ているもの）の正しい食べ方を知らず、そのゆえ瘴癘に侵されることが多かった。[5]これによって、他の地域と比べて、恵州は飲食による養生の文化も遅れていたことがはっきりと分かる。

その上、嶺南には中原と大きく異なる飲食の習慣がある。例えば、蘇軾「聞子由瘦」には次のように述べる。

土人頓頓食諸芋　土人は頓頓として諸芋を食らい
薦以薫鼠燒蝙蝠　薦むるに薫鼠　焼蝙蝠を以てす
舊聞蜜唧嘗嘔吐　舊と蜜唧を聞かば嘗に嘔吐す[6]
稍近蝦蟆緣習俗　稍や近づく蝦蟆　縁習の俗

本詩の自注には「儋耳至難得肉食（儋耳　肉食を得ること至難なり）」とある。海南の人が「薫鼠」「焼蝙蝠」「蜜唧」「蝦蟆」など恐ろしいものを食し、肉食が不足しているだけでなく、普通の穀物も取りにくいというのだ。彼の「與

姪孫元老四首」其一に次のように述べている。

海南連歲不熟、飲食百物艱難、及泉、廣海舶**絕**不至、藥物鮓醬等皆無、厄窮至此、委命而已。老人與過子相對、如兩苦行僧爾。

海南　連歲熟せず、飲食百物は艱難なり、泉、廣の海舶**絕**えて至らざるに及び、藥物、鮓、醬など皆無く、厄窮此に至り、命に委ぬるのみ。老人　過子と相對すれば、兩苦行僧の如し。(7)

高温多濕の風土によって、穀物が毎歲熟せず、別に「書海南風土」に「嶺南天氣卑濕、地氣蒸溽、而海南爲甚。夏秋之交、物無不腐壞者（嶺南の天氣は卑濕、地氣は蒸溽なり、而して海南　甚だしきと爲す。夏秋の交、物は腐壞せざるもの無し）」(8)と述べるように、物が腐りやすくなる。何もない海南では、多くの食物を輸入に頼っており、もし北からの貨物船が來なければ、人の命を運命に委ねなければならない。そのような海南での自分たち父子（「老人」は蘇軾、「過」は蘇過）はまるで苦行僧のように痩せていると言う。

そのほか、嶺南の飲食や農耕の狀況については、弟の蘇轍「和子瞻次韻陶淵明勸農詩」序にも次のように述べられる。

予居海康、農亦甚惰、其耕者多閩人也。然其民甘於魚鰕蟹蝦、故蔬果不毓。冬溫不雪、衣被吉貝、故蕘麻而不績、生蠶而不織。羅紈布帛、仰於四方之負販。工習於鄙樸、故用器不作。醫奪於巫鬼、故方術不治。

予　海康に居り、農　亦た甚だ惰たり、其の耕す者閩人多し。然るに其の民　魚鰕蟹蝦に甘んじ、故に蔬果毓せず。冬温かくして雪ふらず、衣は吉貝を被す、故に麻を蕘して績せず、蠶を生じて織せず、羅紈布帛　四方の負販に仰ぐ。工　鄙樸に習う、故に用器　作らず。醫　巫鬼に奪わる、故に方術　治めず。(9)

紹聖四年、蘇轍は化州（現廣東化縣）別駕、雷州（現廣東海康）に貶される。蘇軾と同じく、蘇轍は左遷地の海康で

は農耕が重視されなかったことを述べている。嶺南には縦横に流れる河川が多く、人々は魚類の食物に甘んじている。更に紡績の先進技術がなく、主に「吉貝」[10]を衣服としている。これによって、嶺南の人々はほとんどを自然の恵みや外来の輸入品に頼って暮らしていることが分かる。

嶺南人が農耕に従事しないことは、蘇軾の「廣州東莞縣資福禪寺羅漢閣記」にも述べられる。

四方之民、皆以勤苦、而得衣食、所得毫末、其苦無量。獨此南越、嶺海之民、貿遷重寶、坐獲富樂。得之也易、享之也愧。

四方の民、皆勤苦を以て、而して衣食を得、得る所は毫末にして、其の苦　量無し。獨り此の南越、嶺海の民、重寶を貿遷して、坐して富樂を獲る。之を得るや易く、之を享るに愧ず。[11]

各地の民はまじめに苦労して衣食を獲得するが、嶺南の民は珍しい寶物を頼りに、富裕な生活を過ごしている。ここでは軽易に富楽な生活を過ごした生き方に批判的な意味が込められている。そのほか、「和陶勸農」の引は次のように述べている。

海南多荒田、俗以貿香爲業、所産秔稌不足於食、乃以藷芋雜米作粥糜以取飽。

海南　荒田多し、俗　貿香を以て業と爲す、産する所の秔稌　食に足らず、乃ち藷芋雜米を以て粥糜を作り、以て飽を取る。[12]

海南は代々香料の交易を業とし、荒れた地が多く、農耕をあまり重視しないという。

以上に見てきたような嶺南の農耕や飲食状況は、蘇軾が現實に卽して記錄したものと考えられる。左遷を契機として、蘇軾は士大夫として農耕が未發達の嶺南の地にどのように關わろうとしたのだろうか。次章では、蘇軾の「勸農」に關わる作品に焦點をしぼって論じたい。

三、蘇軾の「勸農」と「和陶勸農」詩

蘇軾は嶺南の實情に適合した「勸農」を行っている。例えば、惠州に居た時、彼は田植えをする先進的な農具であった「秧馬」を廣めている。[13] また「遊博羅香積寺」には

要令水力供臼磨　水力をして臼磨に供せしむるを要し
與相地脈增隄防　與に地脈を相て　隄防を增す[14]

とある。彼は香積寺の地勢に合わせ、水力を利用して碓磨を作ることを主張する。そのほか、「書柳子厚牛賦後」では牛を保護するべきだと主張している。

嶺外俗皆恬殺牛、而海南爲甚。……病不飮藥、但殺牛以禱、富者至殺十數牛。……予莫能救、故書柳子厚「牛賦」以遺瓊州僧道贇。使以曉**喩**其**鄉**人之有知者、庶幾其少衰乎。

嶺外の俗　皆牛を殺すを恬とし、而して海南は甚だしきと爲す。……病めば藥を飮まず、但だ牛を殺すを以て禱る、富者　十數牛を殺すに至る。……予能く救う莫し、故に柳子厚の「牛賦」を書して以て瓊州の僧道贇に遺る。以て其の**鄉**人の知有る者に曉**喩**せしむれば、其の衰を少なくするに庶幾からん。[15]

嶺外には、人が病氣になると、牛を殺して神様に祈りを捧げる習俗があった。海南の「以巫爲醫、以牛爲藥（巫を以て醫と爲し、牛を以て藥と爲す）」に對して、蘇軾は柳子厚の「牛賦」を書し、牛の農耕に對する重要性を鄉人に知らしめたのである。ちなみに海南の「病すれば藥を飮まず」の狀況に對處すべく、蘇軾は當地の植物を用いて藥を作り、嶺南人に醫学の知識を傳えている。[16]

蘇軾は、嶺南にあって農耕を勧める以外に、陶淵明の「勧農」詩に唱和している。松浦友久氏は陶淵明の「勧農」詩に現れた孔子の躬耕批判の發言と躬耕の實踐との間の論理的な矛盾、及び知識人の「謀食・憂貧」の思想を論じている。(17) 蘇軾の「和陶勧農」六首は、少なからず陶淵明の主張を受け継ぐものであるが、左遷地嶺南が抱える問題に即して、彼獨自の主張も示している。

この詩の引に「予既哀之、乃和淵明「勧農」詩、以告其有知者（予　既に之を哀しみ、乃ち淵明「勧農」の詩に和し、以て其の知る有る者に告ぐ）」と、海南の農耕を哀しむ創作意圖を述べている。注意すべきは、「書柳子厚牛賦後」と同じく、嶺南の「有知者」すなわち知識人を對象としていること、更にこれらの知識人によって農耕の重要性を普通の庶民に傳えようとしていることである。これは知識人こそが文字を知り、文章を讀めるからである。

（其一）

咨爾漢黎、均是一民。　咨爾（ああ）　漢黎、均しく是れ一民。
鄙夷不訓、夫豈其眞。　夷を鄙んで訓えず、夫れ豈に其れ眞ならんや。
怨忿劫質、尋戈相因。　怨忿　劫質、戈を尋ねて相因る。
欺謾莫訴、曲自我人。　欺謾　訴うるなし、曲は我人自りす。

（其二）

天禍爾土、不麥不稷。　天　爾の土に禍し、麥せず稷せず。
民無用物、珍怪是植。　民の無用の物、珍怪　是れ植。
播厥熏木、腐餘是穡。　厥の熏木を播し、腐餘　是れ穡す。
貪夫汚吏、鷹摯狼食。　貪夫　汚吏、鷹摯　狼食。

（其三）

豈無良田、膴膴平陸。
獸蹤交締、鳥喙諧穆。
驚麾朝射、猛豲夜逐。
芋羹諸糜、以飽耆宿。

（其四）

聽我苦言、其福永久。
利爾耜耜、好爾鄰偶。
斬艾蓬藋、南東其畝。
父兄搢梃、以抶游手。

（其五）

天不假易、亦不汝置。
春無遺勤、秋有厚冀。
雲舉雨決、婦姑畢至。
我良孝愛、袒跣何媿。

（其六）

逸諺戲侮、博弈頑鄙。
投之生黎、俾勿冠履。

豈に良田無からんや、膴膴たる平陸。
獸の蹤は交締、鳥の喙は諧穆。
驚麾　朝に射、猛豲　夜に逐う。
芋羹　諸糜、以て耆宿を飽かしむ。

我が苦言を聽け、其の福　永久。
爾の耜耜を利くし、爾の鄰偶を好くす。
蓬藋を斬艾し、其の畝を南東にす。
父兄　梃を搢い、以て游手を抶て。

天は易きを假さざれども、亦た汝を置しくせず。
春に遺勤無く、秋に厚冀有り。
雲舉がり　雨決し、婦姑　畢く至る。
我れ良に孝愛、袒跣　何ぞ媿じんや。

逸諺　戲侮、博弈　頑鄙。
之を生黎に投じ、冠履するなからしめん。

霜降稲實、千箱一軌。　霜降りて　稲實る、千箱　軌を一にす。
大作爾社、一醉醇美。　大いに爾の社を作し、醇美に一醉せん。

この六章は大きく二つの部分に分かれる。前三章では海南の未開な風土や粗末な飲食を紹介し、次の後三章の「勧農」に關わる蘇軾の「苦言」の前提となる。

冒頭では「勧農」の基調を定め、民族差別の觀念を捨て去り、平等の立場で海南の實情を陳述する。蘇軾は自分が屬する漢民族を優位に置くことなく、黎民も漢民も、分け隔てなく同一視している。更に黎人が怨みを持ち、人質を略奪して騒ぎ立てることについて、彼らを欺いたのが我々漢人の責任であることを言う。續く第二章と第三章は海南の自然風土の劣惡さ、人々の生活の苦しさ、原始狀態にある平坦な良田、様々な鳥獸、粗末な飲食などを言う。注目されるのは、汚職の官吏を「鷹」「狼」のような凶惡殘忍なものに喩えていることである。これによって、海南の遅れた狀況は環境の劣惡さだけでなく、政治の腐敗という原因もあったと蘇軾が捉えていたことがわかる。

多くの「勧農」詩は「勧」の形を取って書かれる。蘇軾の「勧農」詩も例にもれず、第四章から彼の「苦言」を説き始め、農具をよく切れるようにして畑を耕し、隣人と友好を結び、父兄と共に懸命に働くこと、續いて第五章は、天がいつも優しく配慮して食物を贈ってくれるのではないから、農作業の手を加えず自然の贈與を待つのはいけないと述べている。最も興味深いのは最後の第六章であり、蘇軾は怠惰で賭博にふける黎民を激しく批判し、それらを生黎に投じなければならないと述べている。「生黎」というのは、海南の黎母山に住んだ黎族を指す。それに對して、生活の方式がより進歩し山外に住んだのが「熟黎」である。『方輿志』（查愼行注による）に「生黎各有洞生。貝布爲衣、兩幅前後爲裙、掩不至膝。椎髻額前。男文臂腿、女文身面（生黎各おの洞生する有り。貝布を衣と爲す、兩幅の前後裙と爲し、掩うこと膝に至らず。額前に椎髻す。男　臂腿に文し、女　身面に文す）」と言うように、生黎は太

古の時代のような暮らしをしている。ここで怠け者と勤勉な勞働者とをはっきり區分し、ねんごろに説得するところには、貧困な海南を衣食が豊かで文明的な土地にしようとする願望が表われている。

以上に分析したように、蘇軾の「和陶勸農」は海南の農耕や飲食の劣悪さを述べるほかに、「漢黎」「吏民」「隣里」、及び「孝愛」に關わる「父兄」「婦姑」などの社會的、家庭的な人間關係にも注意し、彼らが互いに友好關係を築くべきだと主張する。まさに王文誥が言うように、蘇軾は海南の「地瘠民貧」「俗薄習惰」に心を込めて目を向けている。[18] 彼は海南の貧困や悪俗を變えがたいと知りつつも、「勸農」を進めると同時に、「勸農」詩を作って忠告している。陶淵明の「勸農」詩と同じく、蘇軾の和作には知識人の「憂貧」と「憂道」が表現されていると言えよう。

四、嶺南における自己認識

『續資治通鑒長編』によれば、宋代の地方官は普通の公務を執り行う以外、管理地での農耕を勵ます責任も負っている。[19] つまり、「勸農」は地方官の政治業績が評價される重要な職務であった。しかしながら、嶺南時期における蘇軾は公務の權限を持たなかった。彼の「勸農」行爲は自らの功績を求めるものではなく、もっぱら嶺南の民衆の利害を考えるものであったのである。では、その行爲はいかなる意識のもとになされたか。これらの問題をめぐって、蘇軾の自己認識を手がかりに分析してみたい。

嶺南に左遷される前、蘇軾は黄州で農耕に從事した經驗を持つ。嶺南の左遷地に至って、中斷していた農事を再び始めており、「擷菜」の引に「吾借王參軍地種菜、不及半畝、而吾與過子終年飽菜（吾　王參軍の地を借りて菜を種ゆ、半畝に及ばず、而して吾と過子と終年菜に飽く）」[20]とあり、惠州で自ら野菜、茶、薬などを育てている。[21] 他にも海南

での「羅米」に

再拜請邦君　再拜して邦君に請う
願受一廛地　願わくば一廛の地を受けん(22)

「和陶癸卯歳始春、懐古田舎二首」其二に

借我三畝地　我に三畝の地を借さば
結茅爲子鄰　茅を結びて　子の鄰と爲らん
鳩舌儻可學　鳩舌　儻し學ぶべくんば
化爲黎母民　化して黎母の民と爲らん

「次韻王鬱林」に

晩途流落不堪言　晩途　流落　言うに堪えず、
海上春泥手自翻　海上の春泥　手自ら翻す(23)

とある。蘇軾は友人に土地を借り、自ら畑をすき起こし、更に海南の民とならんとする願望を述べている。左遷された蘇軾は海南の農民として生きようとしており、「知非笑昨夢、食力免内愧（非を知りて昨夢を笑い、食力して内愧を免る）」（「羅米」）と労働に慰めを見出している。彼にとって肉体労働に従事して自らを養うのは、内心の恥を紛らわすものであったのだ。長い間嶺南にいた蘇軾は意識して努力し、「開口而食（口を開きて食す）」（蘇轍「和子瞻次韵陶淵明勧農詩」）の嶺南人とはまったく異なっている。中央政界から失脚して、何度も左遷された彼は、ここに至って意氣が揚がり、自らの主張や理想を實際に行動に移し、現實の生活を改善する實踐者となったのである。彼の「躬耕」は一種の「勧農」行爲と見なしてもよいだろう。

ところで、いかに深刻な苦境に身を置いていても、蘇軾は官僚組織の一員たる知識人である。彼は人民の飢寒を心に留め、嶺南に左遷される前から一貫して庶民の生活を氣遣ってきた。「荔支嘆」には「雨順風調百穀登、民不飢寒爲上瑞（雨順風調　百穀登り、民　飢寒せず上瑞と爲す）[24]」とあって、まさに「憂民」思想を述べる知識人・役人としての自我像が表現されている。

蘇軾は海南の貧困を憂え、心を込めて農耕を勵ますと同時に、民衆の教化にも努めている。農業の進歩は文化・學問の發達と密接な關係がある。蘇軾は嶺南の學校が人影なく寂れている狀態を嘆き、當地の人々に講義をしてこの世を生きる道を傳授している。儋州にいた時、貧しい士人であった黎子雲、符林、王霄、潮州の吳子野、瓊州の姜唐佐などは、蘇軾の名を慕ってやって來て、學問を求めた。まさに『瓊臺記事錄』に「宋蘇文忠公之謫儋耳、講學明道、教化日興。瓊州人文之盛、實自公啟之（宋の蘇文忠公儋耳に謫され、講學　道を明らかにし、教化　日に興る。瓊州人文の盛は、實に公自り之れを啟く）」と述べるように、蘇軾の實踐が嶺南の文化・學問發展に大いに貢獻したことが窺われる。

また注意すべきは、蘇軾はしばしば飲食によって、彼自身の身分を強調していることである。物資が欠乏した嶺南で、蘇軾にとって飲食は單なる日常生活の一部にとどまらない特別な意味を持った。例えば、「遊博羅香積寺」に

霏霏落雪看收麪　霏霏　雪を落して收麪を看
隱隱疊鼓聞舂糠　隱隱　鼓を疊（かさ）ねて舂糠を聞く
散流一啜雲子白　散流一啜　雲子白く
炊裂十字瓊肌香　炊裂十字　瓊肌香し
豈惟牢丸薦古味　豈に惟だ牢丸　古味を薦めんや

要使眞一流天漿　眞一の天漿を流れしむるを要す
詩成捧腹便絕倒　詩成りて捧腹し便ち絕倒す
書生說食眞膏肓　書生　食を説くは眞に膏肓

とある。「散流」一句は粥を、「炊裂」一句は餅を詠ずる。「牢九」は食品、「眞一」は酒の名。ここに挙げた詩句は、水力を利用して碓磨（ひきうす）を作った後、豊作の穀物で酒を醸すことを想像している。最後の二句では、自分を書生と稱し、食物についてあれこれと言うのは病が膏肓に入るようなもので、到底治ることはないと述べている。ここには「書生」としての蘇軾のユーモアと憂いが交錯した無力感が漂っている。

そのほか、「客俎經旬無肉、又子由勸不讀書、蕭然清坐、乃無一事」には

使君不復憐烏攫　使君　復た烏攫を憐まず
屬國方將掘鼠餘　屬國　方将（まさ）に鼠餘を掘らんとす(25)

とある。ここでの使君は海南の地方官を指す。第一句は『漢書』黄霸傳にある故事を踏まえる。黄霸傳に次のような故事がある。

（廉吏）食於道旁、烏攫其肉。民有欲詣府口言事者適見之、霸與語道此。後日吏還謁霸、霸見迎勞之、曰「甚苦、食於道旁、乃爲烏所盜肉」。

（廉吏）道旁に食らう、烏　其の肉を攫う。民の府口に詣でて事を言わんと欲する者有りて適たま之れを見、霸與に語りて此れを道う。後日吏還りて霸に謁す、霸見て之れを迎勞し、曰く「甚だ苦しきかな、道旁に食らい、乃ち烏の肉を盜む所と爲る」と。(26)

ここには、廉吏が道旁に食した時、烏に肉を奪われ、長官の黄霸に同情されたことが述べられている。蘇軾は彼自身

を廉吏に喩え、典故の本來の意味を逆に用い、海南の地方官が黄霸とは異なり、小吏である自分の苦境を察してくれないと述べている。續いて第二句は蘇武の典故を用いる。『漢書』蘇武傳に「廩食不至、掘野鼠去草實而食之（廩食至らず、野鼠を掘り、草實を去りて之を食らう）」[27]とあり、蘇武が北海に野鼠を食する辛酸を言う。自分の卑しい地位、苦しい生活、不遇の苦悶への屈折した思いを訴えている。

嶺南時代の蘇軾詩に見える自己認識はどういうものであったか。それを一言で言えば、農民、役人、知識人が一体化した存在、つまり残酷な貧困にも屈せず、苦勞して働き、躬耕實踐の喜びを味わい、主體的に民衆を教化し、嶺南人の現實の生活を一變しようと努める、そのような存在として自分を捉えていたと言ってよいだろう。

五、おわりに

本稿で重點を置いて取り上げた蘇軾の「和陶勸農」には、苦難に耐えて努力して農耕を勵ます蘇軾の姿が見られる。蘇軾は官途も順調ではなく生計が苦しかったにもかかわらず、「民本」思想を實踐すべく努めていた。周知のように、中國文學史において、躬耕を實踐する知識人は決して多くはない。孔子が躬耕批判を提唱したことが大いに働いたものと考えられる。蘇軾が普通の知識人と異なる最大の特徴の一つは、「農耕」に對する態度、すなわち實際の農耕に積極的に身を投じるのみならず、作品の中に自らの躬耕體驗を熱心に詠っている點である。そこにはまた、知識人として民衆の教化に責任を負おうとする「憂民」「憂道」の思想も見て取れよう。

長い間嶺南にいた蘇軾は當地の風土を詠い、ついには海南を故郷と見なすに至った。「吾謫海南、子由雷州、被命卽行、了不相知、至梧乃聞尚在藤也、旦夕當追及、作此」には

他年誰作輿地志　他年　誰か輿地志を作る
海南萬里眞吾鄉　海南萬里　眞に吾が鄉なり[28]

とある。彼は少しずつ海南の生活を愛するようになり、「和陶擬古九首」其四に

稍喜海南州　稍く海南州を喜ぶ
自古無戰場　古え自り戰場無し
奇峰望黎母　奇峰　黎母を望めば
何異嵩與邙　何ぞ嵩と邙に異ならんや[29]

と述べている。海南は中原との距離が遠く、戰いの混乱が及ばない地である。また險しい奇峰があり、黎母山は中原の嵩山や邙山と異ならないという。

以上に見てきたように、蘇軾が詠った嶺南の世界は、經濟的には遅れた未開の地であったが、實は「江湖」と故郷のイメージを兼ね備えた土地であった。彼が嶺南を故郷と見なしたのは、政治の風波が及ばない、「心を安らかにする」地であったからであろう。嶺南で蘇軾の「勸農」は、當地の貧困を一變し、「大作爾社、一醉醇美（大いに爾の社を作し、醇美に一醉せん）」という生活、嶺南の民衆とともに豊作の喜びを心ゆくまで味わうことを希望している。要するに、嶺南で農耕に關する蘇軾の言葉には、苦しい生活の中で溢れ出す望郷の念、あるいは政治の爭いの中で湧き起こる太平の世や安定した生活への願望を見て取ることができるのである。

［注］

（1）この問題については、王水照、朱剛『蘇軾評傳』（南京大學出版社、二〇〇四年）、嚴宇樂「蘇軾、蘇轍、蘇過貶謫嶺南時期心態與作品研究」（復旦大學博士論文、二〇一二年）等が様々な角度から論じている。

（2）清・馮應榴輯注『蘇軾詩集合注』巻三八、上海古籍出版社、二〇〇一年、第五冊、第一九五八頁。以下『合註』と略称。

（3）『合注』巻四二、第五冊、第二一六五頁。

（4）孔凡禮點校『蘇軾文集』巻二四、中華書局、一九八六年、第二冊、第七〇七頁。

（5）「記惠州土芋」（『蘇軾文集』巻七三、第六冊、第二三六五頁）に「岷山之下、凶年以蹲鴟爲糧、不復疫癘、知此物之宜人也。『本草』謂芋、土芝、云益氣充肌。惠州富此物、然人食者不免瘴。吳遠遊曰『此非芋之罪也。芋當去皮、濕紙包、煨之火、過熱、乃熱噉之、則鬆而膩、乃能益氣充肌。今惠人皆和皮水煮冷啖、堅頑少味、其發瘴固宜』。丙子除夜前兩日、夜飢甚、遠遊煨芋兩枚見啖、美甚、乃爲書此帖」とある。

（6）『合注』巻四一、第五冊、第二一二三頁。

（7）『蘇軾文集』巻六〇、第五冊、第一八四一頁。

（8）『蘇軾文集』巻七一、第五冊、第二二七五頁。

（9）蘇轍『欒城後集』巻五（曾棗莊、馬德富校點『欒城集』、上海古籍出版社、一九八七年、第一一九四頁）。

（10）宋・方勺『泊宅編』巻中（四庫全書影印本）に「閩廣多種木棉、樹高七八尺、葉如柞、結實如大菱而色青、秋深即開、露白綿茸然。土人摘取去殼、以鐵杖桿盡黑子、徐以小弓彈令紛起、然後紡績爲布、名曰吉貝」とある。

（11）『蘇軾文集』巻一二、第二冊、第三九七頁。

（12）『合注』巻四一、第五冊、第二一一九～二一二〇頁。

（13）「題秧馬歌後四首」（『蘇軾文集』巻六八、第五冊、第二一五二～第二一五三頁）を参照。

（14）『合注』巻三九、第五冊、第一九八九頁。

（15）『蘇軾文集』巻六六、第五冊、第二〇五八頁。

（16）「海漆録」（『蘇軾文集』巻七三、第六冊、第二三五七頁）に「取倒黏子嫩葉酒蒸之、焙燥爲末、以酢糊丸、日呑百餘、二腑皆平復、然後知其奇藥也。因名之曰海漆、而私記之、以貽好事君子」とある。

（17）松浦友久「陶淵明の『勸農』詩について――知識人社会における『憂道』と『憂貧』」（『中國詩文論叢』第十八集、一九九九年、第一～第一四頁）。

（18）清・王文誥『蘇海識餘』巻一に「海南『和陶勸農』、專因海南而發。其命詞用意、無一常語。此傑作也。當時落筆時、其一片精誠貫注於地瘠民貧、俗薄習惰之間、特寄所以哀之勸之之意」とある。

（19）宋・李燾『續資治通鑒長編』巻六二（中華書局、一九八〇年、第五冊、第一三八六頁）の景徳三年に「丙子、權三司使丁謂等言『……諸州長吏、職當勸農、乃請少卿監、刺史、閤門使已上知州者、並兼管內勸農使、餘及通判並兼勸農事、諸路轉運使、副並兼本路勸農使』。詔可。勸農使入銜自此始」とある。

（20）『合注』巻四〇、第五冊、第二〇八七頁。

（21）「小圃五詠」（『合注』巻三九、第五冊、第二〇四四～第二〇五〇頁）には、自ら植えた人參、地黄、枸杞、甘菊、薏苡が詠われる。惠州で「雨後行菜圃」「種茶」などの作品も作った。

（22）『合注』巻四一、第五冊、第二一三二頁。

（23）『合注』巻四四、第五冊、第二二二九頁。

（24）『合注』巻三九、第五冊、第二〇三〇頁。

（25）『合注』巻四一、第五冊、第二一二四頁。

（26）漢・班固『漢書』黄霸傳巻八九、中華書局、一九六二年、第十一冊、第三六三〇頁。

（27）『漢書』蘇武傳巻五四、第八冊、第二四六三頁。

（28）『合注』巻四一、第五冊、第二一〇七頁。

（29）『合注』巻四二、第五冊、第二一五九頁。

（大学院博士後期課程学生）

摘要

嶺南時期蘇軾的“勸農”詩

趙 蕊蕊

唐宋時期，嶺南地區不僅在經濟、文化上落**後**於中原地區，而且逐漸成爲朝廷貶謫官員的首選之地。北宋蘇軾謫居嶺南長達八年之久，他常哀嘆當地的農耕狀況，積極從事各種勸農活動，並唱和陶淵明《勸農》詩。其唱和之作雖有繼承因**素**，但比陶淵明的原作更爲具體，並且涉及民族、官民、鄰里、家庭等多種關**係**。通過分析可知，蘇軾的勸農並非爲自己的政治功績，而是完全出於對民眾利害的考慮。他希望改變嶺南的落後狀況，甚至把那裡當作故**鄉**，親自從事農耕，並主動承擔起教化民眾的責任。集官員、農民、知識分子於一身的蘇軾積極改變嶺南的生活狀態，其勸農詩從側面也能反映他在經歷政治漩渦之後對安定生活的嚮往。